

# 型を考える

—— 玉城政美追悼 ——

仲 程 昌 徳

玉城さんは、おもろや琉歌の構造を解明し、体系化しようと考え、それを形にしはじめていた。

玉城さんは、琉大時代嘉味田宗栄先生、法政時代外間守善先生に学び、教鞭をとるようになって以後仲宗根政善先生、池宮正治先生らとともに琉球方言、琉球文学研究に没頭していた。そして、いつのころからか彼ら先達の研究とは異なるところへ一歩踏み出していた。

その大きな契機をなしたのは上村幸雄先生の赴任と奥田靖雄先生の集中講義であったのではないかと思われる。

ドイツに居られた上村幸雄先生が、国立国語研究所

をお辞めになられて琉大に赴任されたのが一九七六年。そして上村先生が尊敬しておられた日本語学者奥田靖雄先生が、上村先生のお招きで集中講義を行うようになったのが一九七八年。以後、毎年のように、沖縄に足を運ばれた。

奥田先生の講義は大層刺激的で、多くの聴講者を魅了し、啓発した。先生を中心にした新潟・水上での合宿には、毎年多くの研究者が参加しているが、玉城さんもそのひとりであった。

上村、奥田両先生が沖縄の学問研究に与えた影響の大きさは、計り知れないものがある。玉城さんがまさにその証人である。そしてそれは、いうまでもなく玉

城さんに、それを受け入れるだけの十分な素地があったということだろう。

玉城さんといえは、すぐに思い浮かぶことが二、三ある。

一つは囲碁である。

今は、高円寺駅前とすぐ近くのカード下とで二店に増えたが、当時沖縄関係図書を買っていた古書店の球陽書房は、駅前の一店だけだった。本を探しにいくと、ご主人は、奥さんと呼んで店番を代り、二階に上がり、すぐに基盤を出した。そして、えんえんと打ち続けた。玉城さんは、そこのご主人と囲碁仲間で、好敵手だった。

あと一つは、インベーダー・ゲームである。

学生寮のあった豪徳寺の駅前も、今では大きく変わってしまったが、当時駅前にゲーム屋さんがあって、ゲーム機が幾つか置かれていた、休みの日には、玉城さんは、そこにいた。それこそわき目もふらず、高得点をめざして、えんえんと格闘していた。

玉城さんが好きだった遊びがあと一つあった。麻雀である。

友人のいた中野に出かけて、夜を明かすのがさいさいだった。およそ、徹底していたといえるのだが、囲碁も、インベーダー・ゲームも麻雀も、形を大切な要素とする対象であることで共通していた。

玉城さんは、形のないやり方を、嫌った。

玉城さんがプロップやマシエフスキーを好んだのも、同じことだろう。一見形がないように見えるものでも、そこには確固とした形が潜んでいることを、鮮やかな手つきで示して見せたのだから。

玉城さんが、もう少し元気でいたらと思う。感謝するところを持ちながら、それを口に出して言えなかった、不器用な男の、片口笑いがなつかしいだけではなく、彼の周辺にいた研究者が、彼の手法を踏襲しているのを見るにつけ、嬉しさとともに、途中で終わった彼の学問が惜しまれるからである。

死は、年齢の順にはいかなないものの、年下の者を先に失うことほど寂しいことはない。

(なかほど まさのり・前琉球大学教員)